私のボランティア

濵中　忠（登録会員）

2011年3月末の退職が迫った3月11日に東日本大震災が発生しました。退職後東北へボランティアに行くことを決め、受け入れ先を探し始めました。当時67歳でしたが、幸い仙台YWCAに拠点を置いて支援活動を開始していたJIFH(日本国際飢餓対策機構)に、受け入れて貰うことになりました。

4月中旬に寝袋、作業着等の他、指示された1週間分の食糧を携え、仙台に入りました。それから約40日間、支援物資倉庫での搬入搬出、石巻等の被災地へ支援物資の配布、住宅の瓦礫処理、泥出し等を行いました。5月末に一旦帰阪し、9月に再訪し、計2か月余り活動しました。その間JIFHが借り上げた仙台YWCAの2、3階フロアーで、多くのボランティアと寝食を共にしました。活動中は筋肉痛がとれず、肉体的にはかなりきつかったが、精神的には辛いものではなかった。それはボランティアの人達が優しく、また家や家族を津波で失いながらも強く生きて行こうとしている被災者の方々と接したことによると思います。例えば、自宅が津波で流されたのに、支援物資倉庫でボランティアをしていた女性、あるいは春に次いで秋に再会した若い男性は、10日間名古屋で仕事をした後、自動車で仙台に来て2、3日ボランティアしてまた名古屋に戻る生活を10数回も繰り返していました。私がこれまでの人生で経験したことのない、人の優しさ、奉仕の精神、そして生きる力等を教えられたボランティアでした。

地元大阪に帰った翌年から、前期のJIFHの大阪事務所でニュースレターの発送や海外の里子からの英文手紙の和訳のボランティア、あるいは震災関連で、神戸の『人と防災未来センター』で展示解説のボランティア等を続けています。また健康維持を兼ね、毎朝ラジオ体操の前に近隣住民と共に公園の清掃が日課となっています。

退職、そして東北のボランティアから、その後の生活が変わりましたが、ボランティアは生活の一部になっています。